

国際社会科学

2015 第65輯 抜刷

山本 泰

「社会がわかるとはどういうことか？
社会学がわかるとはどういうことか？」1

佐藤 俊樹

「始まりの時 寡黙と沈黙の間で
—— 山本泰先生を送る」17

山本泰教授略歴と業績目録23

2016年3月31日発行

東京大学 大学院総合文化研究科 国際社会科学専攻

社会がわかるとはどういうことか？ 社会学がわかるとはどういうことか？

Understanding Society through Sociology, Learning Sociology through Society

山 本 泰

2010 年度冬学期に「学術俯瞰講義」を東大の様々な部署で社会学の教育研究に携わっている仲間とともに担当した。その授業のコピーにはこう書いた。

学術俯瞰講義に今回「社会学」が登場します。社会学は不思議な学問です。社会学には固有な対象がない。社会学は人間世界の森羅万象を研究していますが、社会学が研究している分野はそれ以外の学問の人も研究しています。どこにもあり、どこにもない。

まず、「学術俯瞰講義」について少し説明しよう。この講義は当時の東大総長であった小宮山宏氏の発案によって 2005 年から教養学部で開講されるようになった。小宮山先生の趣旨は、次のようなものであった。

世の中にはカルチャースクールでも何でも、テーマ講義のようなものはたくさんある。あるテーマをキーワードにした連想ゲームのようなもので、学問を語るスタイルではない。大学に必要なのは、〇〇学という学問分野とは何か？を正面から語る講義であって、これがあってこそ、若い人が自分の専門分野を決めたりするときの参考になる。

小宮山先生のこのような発言の背景には、「知の爆発 (The Explosion of Knowledge)」が人類社会の危機だという考えがある。特に 20 世紀に入って知識の量 (情報量) が増え、知識の細分化が進む一方だが、その知識の縮約 (縮減) を進めないと、知識は利用できなくなると何度も仰っていた。そうした危機に対応する大学の試みが学術俯瞰講義であると。

私は 2005 年当初から毎学期文理 1 コマずつのこの授業の企画立案に携わってきたが、総長の趣旨に沿う授業を組み立てることは非常に難しかった。どうしても「テーマ講義」になってしまうのである。そうならないのはいつも数学で、どのような切り口から数学を語っても、確かにそこには「数学」があるのだと感じられた。

社会学についても学術俯瞰講義をやりたい (やらなければならない) と思ってきたが、これは大変な苦行となった。社会学こそ、社会というキーワードを基にした連想ゲームではないのか？

そういう経緯があって開講されたのが 2010 年度冬学期の「社会学ワンダーランド」である。その中身については、<http://www.gfk.c.u-tokyo.ac.jp/archives/342> をご参照いただきたい。また、これを基にした、同名の図書が出版されているので、そちらも参照いただければ幸いである (山本泰・佐藤俊樹・佐藤健二 (共編著) 『社会学ワンダーランド』新世社、2013 年)。

さて、この授業の企画段階で、自然科学の先生たちとも社会学について議論する機会があった。その先生方が言うには、「社会学は社会学者の数だけあるというではないですか？ そもそも社会学者の間で

＜それは社会学ではない＞と言える基準はあるのですか？」。たしかに、おっしゃることは理解できる。自然科学であれば、決裁的な実験というものがあり、その手続きをクリアできなければそれはニセモノなのである。先の生命科学（幹細胞研究）の例のように⁽¹⁾。

社会学は「なんでもあり」というのは事実には反していると思うが、議論の余地なく白黒をつける手続き（外部基準）がないことも確かであろう。が、このことは政治学でも経済学にもあると思われる。このどちらの学問も間違ったことが堂々と言われてまかり通っていると思うが（例えば景気対策や小選挙区制）、そういうことをことさらに言われる社会学とは何なのだろう？このことをずっと考えてきた。

そういうこともあって、『社会学ワンダーランド』という本の表紙の帯に「社会がわかるとはどういうことか？社会学がわかるとはどういうことか？」と書くことにした。この13回の授業の進行役を務め、授業の始めと終わりに、「今日はこういう趣旨のことが話されます」「今日はこういう趣旨から＜社会学＞の講義がありました」と説明をしていたが、毎回の授業アンケートを読むと、「ますます社会学がわからなくなった」とか書いてあるのである。

そういうことを授業アンケートにさくさく書いてしまう学生の気持ちもわからないわけではない。世の中の書店には「これ一冊で社会学がわかる！」などと書いた本が並んでいるので、仕方がないとも思う。数学ですら、素数論であれ変分法であれ、とても難解な個々の分野に沈潜してこそ、「これが数学だ」とわかるのだ。そうは言うものの、社会学にはどうしてこういうわからない感がついて回るのか？学術俯瞰講義の各回の講義を聴いても、「これが社会学だ」と思ってもらえなかったとすれば、それはこちら（企画の側）の落ち度というものだろう。

本稿では、そのような経緯と反省から、「社会がわかるとはどういうことか？社会学がわかるとはどういうことか？」について考えたい⁽²⁾。

以下の目次

1. ノーマルサイエンスとしての社会学……3
2. 社会学教育を考える……4
3. 社会がわかるということ……7
4. 社会学がわからなくなるとき……10
5. おわりに……14

⁽¹⁾ この場での議論も参考になる。自然科学の先生に私が「それならば、物理学では何が物理学かという定義はあるのですか？」と聞いた。答えて曰く「原子から交通渋滞まで何を対象にしても、質量と運動（エネルギー）に分解すればそれは物理学だ」。再度私が「その基準で物理学と化学を分けられますか？」と聞いたところ、「そんなことはできないし、する必要もない。両者が交わるところに最先端の研究領域がある」との答えであった。どうやら社会科学の分野の人間は自然科学への理解が遅れているように思われる。物理学と化学はどう違うのですかと学生が聞きに来ればそのように答えるということなら、社会学と経済学はどう違うのですかと聞きに来られたときにも同様に答えればよいのであろう。つまり、外延（境界）を定義するのではなく、内包（エッセンス）を定義するということである。以下ではそのような趣旨で議論を進める。

⁽²⁾ 鈴木洋仁「そのテキストの読者は誰か？：書評『社会学ワンダーランド』」『書評ソシオロギス No.10』2014。
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slogos/review_sociologos/pdf/review1001suzuki.pdf

1. ノーマルサイエンスとしての社会学

1980年ごろ盛んに「ノーマルサイエンスとしての社会学」ということが言われた。これはK. ポパーの「仮説と反証」を機軸とする科学観に沿ったもので、マルクス主義や批判理論のような反論可能性のないものは科学（社会学）とは言わないという（機能主義者の側の）主張である。

これが社会学の性質をどこまで言い当てているかは別として、第一次近似としてはそうは間違っていないと思う。これまで私が担当してきた授業（教養学部の3年生4年生向けの「社会学理論」）でもまずこれを真似て、概要を以下のように教えることにしている。

(1) まず、社会学の対象である社会というのは、行為（者）の間の相互作用やつながりである。相互作用とは「お互いに影響を及ぼしあっているという事実」であり、これらは「こと」である。大多数の自然科学は「もの」を研究の対象としているので、まずはそこがちがう。ちなみに、「もの」とは質量のあるものであり、「こと」とは質量のないものを言う。自然科学で「こと」を対象にしているのは、進化学などが典型である。

(2) 社会学が対象とする「こと」には限定がある。観察可能な「こと」に限られる。従って、神様はいるかどうか、死後の世界などは対象ではない。自殺の多くは観察者のいないところで行われるが、自殺統計などという形なら観察可能なので、対象となる。

(3) 社会学は何らかの仕方で「観察可能なことを説明する」という形で行われる。社会学以外でも多くの場合は、直接には観察されないもので観察可能なことを説明するという形を取る。りんごの落下は観察されるものだが、重力は直接には観察されない。熱力学の三法則も直接には観察されないし、それを証明した人はない。だからあくまで仮説なのだが、古今東西、人類が行ってきた観察の歴史の中でこれに反する事象（「こと」）は見つかっていないというだけのことだ（小宮山先生はそのように説明をしておられた。見事なポパー図式である）。

(4) 初期（18世紀）の社会学では、説明変数はいわゆる趨勢命題であった。社会進化とか「ゲゼルシャフトからゲマインシャフトへ」など。これは反証可能性に乏しいし、自文化中心主義の誇りを免れない。これに対して、19世紀の中ごろに法則的理解が現れた。マルクスであり、その後のデュルケームである。これが今の社会学の基礎である。その後に機能主義者（パーソンズやマートン）によってシステムの理解が提唱され、社会学のもうひとつのパラダイムとして定着し、これがルーマンなどに引き継がれている。

この説明はかなり複雑で、(3)の途中までしか話さないことにしているが、概要はこのようなことである。

社会学者が「おもしろい」と思うものには二つあるように思う。ひとつは、対象があたらしいこと。それまで知られていなかった（気づかれていなかった）ことは人間の世界のことであればなんでも「おもしろい」。もうひとつは、「説明がおもしろい」。既知のことであっても「こんな説明があるのか！」と

³⁾ 「お話」とは narrative のことだが、この点については、Peter Berger, *Adventures of an Accidental Sociologist: How to Explain the World without Becoming a Bore*, Amherst: Prometheus Books, 2011 が面白い。BU（ボストン大学）のこの大御所曰く、「今の社会学は退屈とお話が跋扈している」。お話の典型はポストモダンの議論だという。退屈とは、皆が過去の社会学の知識の使い回しをやっているということで、これについても手厳しい。

というのは文句なくおもしろい。いずれにせよ、説明されるもの（「こと」）がきちんとあってこそその話であって、それがなければ単なるお話に過ぎない⁽³⁾。

このようなことを「社会学理論」の最初の部分で話すことにしているのは、社会学はそんなに特殊なことをしているのではないことをまず理解してもらいたいと思うからである。観察されること（事象）を観察されないこと（仮説）で説明するというのはごく一般的である。

社会学を特定するには、社会学が（a）どのような「観察されること（事象）」を、（b）どのような「観察されないこと（仮説）」で説明するかを言えばよい。（a）と（b）にはこれまでの経験から相性のよいセットが蓄積されている。これは定跡（定石）のようなもので、言葉を換えれば、「社会学理論」そのものである。私の講義では、このような趣旨で、社会学の定跡を教えてきた。定跡を学ばずに何年将棋をやっても「へぼ将棋」にしかならない。将棋が上達するようになるには棋譜を学ぶのが常道というものだ、と言っている。

まずは、日本中の大学の社会学の講義はこういう風に基本を教えるべきだと思う。社会学の中級から上級の教科書の世界標準となっているハラランボスの *Sociology: Themes and Perspectives*⁽⁴⁾もそのように書かれている。

たしかに、そのように言うと社会学は自由でなくなって、面白みが殺されると嫌う人もいるだろう。私も高校生ときに社会学というものに惹かれたのだが、その時は「何でも許されるらしい」というのが魅力のように思えた。しかし、東大に入学し、お目当ての先生だった見田宗介先生のゼミに参加してみると大違いだとわかった。この先生は、「何でもあり」というような、自分の思いだけしか内容がないような発表が始まるとすぐに寝てしまうのだった。見ている者にとっても、起きていて怒られるより何倍も怖い修行だった。社会学の自由さや面白さは、そんな手前にあるのではなくて、もっともっと奥にあるのだということを思い知らされた。偉大な先人の棋譜を学んで初めて、「自分の将棋」の世界が開けるのと同じように。

2. 社会学教育を考える

社会学の授業には3つのレベルがある。初級、中級、上級である。

自動車教習所に喩えると、初級は、自動車の仕組みや道路交通法などの座学であり、自動車って足元にペダルが2つ（3つ）あるとかいうことを知ることである。エンジブレーキというペダルはない。バスやトラクターやいろいろな種類があることを知るためにオートショーなどを見に行くのもよいという程度。

社会学の授業で言うと、初級とはイントロダクトリーの意味であり、アメリカ合衆国の大学で言うと100番台の授業。いくつかのタイプがある。（1）これまでの社会学の業績と言えるものを19世紀から始めて、どのような内容であったかを紹介していく「社会学史的アプローチ」。デュルケムやウェーバーの名前も知らなかった学生向け。（2）社会学の研究分野を挙げ、それぞれの対象について社会学がな

⁽⁴⁾ Michael Haralambos and Martin Holborn, *Sociology: Themes and Perspectives*, Eighth edition, London: Collins Educational, 2013.

した学問的貢献を紹介する。都市ならばシカゴ学派がどのような発見をして、それが今の都市研究にどうつながっているのか？家族や大小の集団について社会学はどういう知見をもたらしたか？という具合である。私の知る限りの世界中の社会学の初級の教科書は(1)と(2)のいずれかであるようだ。

(1)は日本の入門書の特色といえる。単著で書かれることが多い。(2)は共著が多い。(2)には二通りの形がある。(a)は不平等(階層)から始めるタイプで、貧困、人種、ジェンダー、家族、教育が続く。不平等は社会の普遍的な性質なので、不平等がそれぞれの社会でどのように構造化され、再生産されていくのかを、人種や家族、教育などで見ていく。(b)は文化から始まる。社会は統合されているという観点から、まずは文化(価値や規範)の概念を説明し、社会化(家族)、世代、教育などの議論を経て、最後に社会変動を取り上げることも多い。これについては、かつては(a)が標準であったが今はほとんどなく、(b)が大多数となった。これはアメリカ合衆国でも日本でも同じようだ⁵⁾。

中級(学部の専門課程)とは、社会学を「使えるようになる」ことを目指すレベルである。学問的研究の領域(学問分野)は様々あり、教育(学)であったり、地域(研究)であったりするが、どの領域でも社会学は基本的なツールのひとつとして使われている。自分の研究関心に応じて、自分なりに社会学を使うことができるようにするのが教育目標となる。

自動車教習所の喩えで言うと、これは仮免許である。社会学という自動車をなんとか自分で動かせるようになるのだから。観察対象と説明変数の相性のよい組み合わせ(こういうことを説明したいなら、説明には3つのやり方があるとか)を知っていれば、地域研究でも文化研究でも社会学は、「役に立つ」。なんとなく見よう見まねで運転をしているようなもので、事故を起こさないためには誰かが横で見ないといけない。学部3年生4年生から修士課程のゼミでの教師の役割はこれだ。

中級レベルの社会学の講義は、社会学の主な潮流(理論)を取り上げ、それぞれの代表的な研究を紹介する形をとる。代表的な研究は、機能主義ならマートンやパーソンズ、葛藤理論ならマルクスとミルズなど。現象学の潮流(理論)をあわせて、ほぼ3つである。ここでは社会学の定跡として確立されている理論(モデル)を理解させることが主眼となる。研究対象と研究方法(理論やモデル)を分離して議論する点が特色といえよう。研究方法(理論やモデル)を抽出することが主眼であり、様々な理論やモデルを各自が興味をもつ研究対象に適用できるように授業を行う。社会学とはツールであり、そのツールを習得すれば、いくらでも応用が利くことになる⁶⁾。

中級の授業でツール(理論やモデル)に焦点を当てると退屈になる、ということはない。理論やモデルは考え方(社会の「見立て」)なので、そこに具体を盛り込むことはいくらでもできる。私はこれまで、

⁵⁾ 上記の(1)(2)でもないのが、有名な Zygmunt Bauman and Tim May の *Thinking Sociologically, Second Edition*, Blackwell Publishing, 2001。第一版(1990)の翻訳がある。奥井智之訳『社会学の考え方：日常生活の成り立ちを探る』HBJ出版局、1993年。私の「社会学理論」は教え方としては、この本に近い。

⁶⁾ 研究対象と研究方法(理論やモデル)を分離するためには、研究対象の抽象度を上げる必要がある。家族や地域社会などに即して議論をすればそれは初級である。抽象度を上げると、研究対象は、社会関係の類型(結合、支配、葛藤)や、権力関係などになる。結合は、協力、交換、親和の3つに分けられる。権力関係を、ウェーバとは違って、多数者と少数者(マジョリティ・マイノリティ)の関係として取り上げる。これらをどれも3者関係の創発特性(emergent property)として扱うことを議論の骨としている。本当に社会学の世界に入ったと言えるのはここからだろう。

映画や歌謡曲で取り上げられる様々な人生のことを自由に話してきたし、機能主義 vs. 葛藤理論のパートでは、1970年代のサンフランシスコのゲイムーブメントのDVDを皆で見て議論してきた。ハーヴェイ・ミルクについての優れたドキュメンタリー（*The Times of Harvey Milk*, 1984）である。感想を述べ合うのではない。複数の理論やモデルの強み弱みを議論するのである。

ここまでできるようになると社会学がおもしろくなるわけだが、まだまだ上がある。上級（アドバンスド）は、既存のツールを使いこなすだけではなく、新しいツール（説明される「こと」を同定する方法と、その説明の理論・モデル）を作り出すことが主眼となる。社会学を専門とする大学院の教育課程の到達目標となる。

将棋の例に戻れば、このレベルで社会学を研究する基本は、様々な手（＝戦法、四間飛車や美濃囲いなど）を覚えることではなく、大山名人なりがこの戦法を考案するようになった経緯や動機（社会学の言葉で言えば「問題意識」）を理解することである。「問題意識」とは、業界用語かもしれないが、「これは変だな」「もっとうまく説明できないか?」とか思う着想、目の付けどころと言ってよいだろう。

これは、これまでの研究の「利用」ではなく、破壊と創造であり、具体的な対象と向かい合い、それについてこれまで言われていることと言われていないこと（既知と未知）を書きだすところから始める大変な作業になる。今は誰でも使えるツールのようにになっている理論も、誰かが作り出したものであり、その時は七転八倒の苦労があったということがわかると、学問の蓄積への尊敬の気持ちが沸くはずだ。出来上がった（完成した）理論というものはなく、常に批判や反証にさらされ、少しずつ進化していくものだ。

この進化には社会学の場合は二つの条件（環境）があるように思う。ひとつは反証可能性。世の中は絶えず変化しているし、階層や地域などによって同じことは二つとないと言ってもよいので、常に「そうではない事例」が見つかってしまう。もっと厄介なのは、「陳腐化」。社会学者が何かを言うと次々と世間の人たちの常識になってしまう。常識はおもしろくない。社会学は「当たり前」の壁を自分で作っているようなものだ。「消費社会」「ジェンダー」という概念が新しかった期間は5年もなかっただろう。成功すればかならず失敗する。関西国際空港と同じで、地盤沈下が著しいのだ。

初級から上級までのこうした事情はかなり社会学に特有なものだろう。このようなことを考慮して、社会学をどう教えていくか（社会学をどのようなステップを踏んで学んでもらうか）という順序を考えてみると、「社会学がわからない」にも様々なレベルや内容があるということになる。社会学はわかりにくいという声にもどのような人が何を期待して（不満を）言っているのかによって、内容は相当に異なるのだ。

まず、「どのような人が」についていうと、私の知る限り、アメリカ合衆国では、初級・中級のレベルの人が「社会学はわかりにくい」と言うことはまずない。他の学問分野と同じように難しいのであり、同じように学ぶ努力をすればよいことなのである⁷⁾。

⁷⁾ むしろ社会学の上級の学生（大学院生）がそう言うことが多い。社会学は説明変数の種類が多すぎて、どれを使ったらよいのかわからないと。これはきちんと社会学の教育を受けた人の言うことだと思う。確かに当事者（大学院生）にとっては困ることだろうが、それは社会学が豊かだということであって、なんら非難されるべきことではない。

それには二つの背景があると思われる。社会学教育が大学から始まることは共通しているが、社会学教育が職業として確立しているかどうかの差がまずある。具体的に言うと、欧米では社会学の教科書を書くことが社会学者の仕事のひとつとして確立しており、教科書を書くだけで社会学者の仕事と十分に評価される。ハラランボスやギデンズがよい例である。日本ではそうではないので、どんな立派な教科書を書いてもまず評価されない。そうすると教科書を書くことは二次的な仕事になる。かくして、社会学の教科書の質の違いは日本と欧米で絶望的に大きい。「この一冊で社会が丸ごとわかる」みたいな本では概念をきちんと教えることがない。社会学は「いま風のお話」に終わってしまう。

この背景には、教育学部には国語教育、物理教育などと並ぶ形で、社会科教育という課程（あるいは専攻）があり、そこには政治や経済は含まれているが、社会学に相当する分野がないことも影響が大きいだろう。社会学に相当する分野をどう教えるかを研究する部門が教育学部にもないのである（社会学科にもない）。これは重要な論点で、学術会議でも議論されていると聞いている。

もうひとつの問題点として、日本とアメリカ合衆国やイギリスでは、社会学の内容そのもの（社会学と同定される範囲）が違うということもしばしば指摘される。つまり、欧米圏では社会学はサイエンス（ノーマルサイエンス）の以上でも以下でもないが、日本では社会学とは、それプラス、「思想」あるいは「流行」である。

（少なくとも）アメリカ合衆国の大学の学士課程で社会学を学んでいる学生の割合（社会学メジャーの学生数／全体の学生数）は、日本に比べて圧倒的に高い。ロースクールやビジネススクールは大学院だからである。マルチン・ルーサー・キング Jr. がアトランタの名門大学モアハウス・カレッジで学んだのも社会学だった。学部段階の社会学教育のボリュームが違うのであり、おのずと標準化・共通化が進むのだろう。

日本では社会学教授などの地位を得ている人がノーマルサイエンスの域に収まらない研究をしていることも多くあるし、どう見ても「社会学」とは思えない本を書いている人が社会学者を名乗っているという現状もある。もちろん、アメリカ合衆国にもそういう先生方もたくさんいるが、数からして目立たないのである。

そういう人たちがたくさんいるということは悪いことではない。むしろこれらの人々は社会学の領域を拡大してくれるパイオニアでもあるのであって、彼ら彼女らが発見してくれた新しい「こと」や問題意識（不思議の感覚や萌芽的な仮説）を社会学者がきちんと定式化し、社会学の幅を広くしていけばよいのである。しかし、これは社会学における「知識の爆発」という問題でもあって、消化する作業がなかなか追いつかない現状となっている。多勢に無勢。

3. 社会がわかるということ

社会学がわかりやすいかわかりにくいかを、社会学の「本質論」（そもそも社会学は…という特殊論）からいきなり始めるのではなく、まずは教え方の問題として捉える。これが冷静な対応というものであろう。次に、社会がわかるということ、社会学がわかるということについて考えてみよう。いよいよ本題である。

まず、次のような順序を仮定してみよう。(1) 社会学がなくても私たちは社会のことをわかっている

(程度の差はあれ、知っている)。(2) 社会学を学ぶともう少し社会のことがわかるようになる(どういう意味で?)。その後で、(3) 社会をよく知るツールとしての社会学がわかったとわかる。

ここで重要なことは、「社会がわかる」ということと、「社会学がわかる」ということを区別して考えることである。

例えば、お金の世界のことがよくわかっている人がいるとしよう。この人はお金儲けがうまい。ふつうの言葉で言えば、わかっているかどうかは結果で測られるのであって、お金儲けがうまければその人はお金の世界のことを知っているのである。しかしこれらの人々は必ずしも(というか、多くの場合)経済学など知らない。たしかに逆も真であり、社会学者ほど社会(世間)のことを知らない人間はいないとよく言われる。

つまり、こういうことであろう。経済学も社会学も経済や社会のことをある特定の仕方では知るのであって、それだけが経済や社会のことを知るすべでない。ということは、社会学のことがわかって(社会学をツールとして使うことができるようになったとしても)、社会のことが全部(丸ごと)わかるなどということはない。特定の仕方ではわかるだけであるから、社会そのものはなぞとして残ってもおかしくない。なぞがますます深まることもよくある。例えば、隅田川の堤防で暮らしているホームレスの人たちのことは、社会学では貧困や社会包摂/排除の枠組み(理論)などで様々に説明することができる。が、この人たちに接していつも思うことは「この人たちは私たちの理解や説明の更に向こう側にいて、とてつもなく奥が深い」である。フィールドワークは社会学が敗北を経験するためにあると言って過言でない。しかしだからと言って、「そんなことなら社会学には存在意味がない」というわけではない。それなりの認識利得はある。「とてつもなく奥が深い」ということがわかるというだけでも。

「社会学を以ってしても社会はわからないものだとしたら、社会学も社会と同じようにわからないものなのではないか」という意見もある。「社会というのはよくわからないものだとすれば、それと格闘する社会学もよくわからないものになるしかない」と。これも理解できないわけではないが、少し考えれば違うと思う。「社会学はもし社会と同じようにわからないものなら存在意義はない」。これは学術俯瞰講義の討議の中で提起された論点でもあり、正しいと思う。それを認めたくえで議論を先に進める必要がある。

ここからが本当の問題だと思う。「社会がわかる」とはどういうことか、「社会学がわかる」とはどういうことか?

まずは初級のレベルでこの二つがどういうことなのかを考えよう。

学術俯瞰講義の中で、園田茂人先生がこんな話をしていました。自分が子どものときに、お父さんとお母さんは、自分とお風呂に入ると同じことを聞く。「夫婦が離婚したらあんたはどっちに行く?」と。園田先生はお父さんとお風呂のときは「お父さん」と答え、お母さんとお風呂のときは「お母さん」と答えていたそうだが、子ども心に「大人って変だな」と思っていたそうである。^⑧

⑧ アクティブ・ラーニングはいまや流行(が終わった)とも言え、「活動あって学習なし」とも批判される。しかし、学問的な基礎のある概念(心理学)であり、学習理論での概要は以下のようにまとめられる。まず、学習モデルとして、模倣と観察学習がある。

模倣(imitation)は、N.E.ミラー(Miller)やJ.ダラード(Dollard)などの業績が古典(1940年代)で、人間の模倣行動を「模倣学習」という観点からみて「動因低減説」によって説明しようとした。学習の二者

アクティブ・ラーニングの世界で言われる、ミラーリングとモデリングという考え方を当てはめてみよう^⑧。ミラーリングとは学生などがペアになって、相手が言ったことを復唱し、またそれを聞いて言い直したりして、自分と相手の理解のマッチングを取ることをいう。相手の言うことを聞き取る技術を磨くだけでなく、相手にきちんと理解されるにはどのように話したらよいかを学ぶ。互いから学ぶのである。これに対してモデリングとは、そのようなやり取りをしている二人を観察して、二人は何をしているのか？ どのようなときに誤解が生じるのか？ 意思疎通の困難やコツを二人のやり取りを観察しながら学ぶことである。

どちらも悲しくさせないために、お父さんとお風呂のときは「お父さん」と答え、お母さんとお風呂のときは「お母さん」と答えていた園田少年は、そうとうに複雑なミラーリングとモデリングをやっていたことになる。同じことを聞いていても、お父さんとお母さんは違う観点から同じ思惑を持って聞いている。お父さんとお母さんのずれは自分（子ども）をはさんでこそ生まれるものだということもわかっていたようで、このことがわかるのはモデリング（三者関係での観察）をきちんとやっていたからということになるだろう。園田少年は頭のよい子どもだったとしか言いようがない。

私は小学校4年生のときに家出をした。父と母に厳しく叱られ、自分の居場所がないと思ったからである。しかし、電信柱を3本ほど家から離れるとそこにうずくまってしまった。怖くなったのである。そのときに私も、母と私のやり取りを父の目から見、父と私のやり取りを母の目から見るというモデリングをやって、私の居場所はないと「わかった」のである。しかし、はたと気がつけば、「子どもの生とはこんなもので、自分の家以外のどこかに居場所があるわけではない」のであり、30分ほどして家に帰った。「社会のことがわかった」などと考える余裕はなかったが、私もこのときそれなりに何かを学んだ。

これを社会学の言葉で言えば、二者関係と三者関係の話となり、三者関係は二者関係を足し合わせたものではないということになるだろうが、そういう抽象的な図式をもちいることがなくても、園田少年はお風呂の経験から、私は家出の経験から「社会というものがわかっていた」ということになるだろう。私は、家に自分の居場所はなくとも、それが子どもというものなのだと「わかった」。

私たちは社会学以前にそういう形で「社会というもの」を知っている。これは普通のことであり、常に既に所与の世界として「社会」は知られている。

こういう認識（「わかる」）には終わりはない。自分の受け答え次第で、お父さんとお母さんの力学は変わっていくし、それ以外にも様々な要素が働くので、「社会がわかる」には「ここで終わり」というものはない。私が30分で家に帰らなかったら、私の家の夫婦関係・親子関係はどう変わって行っただろうか？ それは一回きりの「こと」なので、誰にもわからないのである。

モデルであり、手がかり、反応、報酬（強化）によって学習が成り立つと考えた。

観察学習（observational learning）は、他者（モデル）の行動を観察するだけで、その行動系を習得することができるとする。もともとは、バンデューラが社会的学習理論を提唱する上で中心においた学習で、これがモデリングと言われるものである。A. Bandura, *Psychological Modeling: Conflicting Theories*, Chicago: Aldine De Gruyter, 1971 = 『モデリングの心理学：観察学習の理論と方法』金子書房、1985年。

社会学で言えば、これはG.H.ミードの古典：*Mind, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press, 1934に近い考え方であり、模倣学習はプレイ、観察学習はゲームにあたると言ってよいだろう。ゲームには、（潜在的にも）観察者視点が入っているからだ。

そうだからこそ、誰もが時折「世の中というところはよくわからないな」とため息をつくのである。「社会がわかる」というのは受験参考書で何かの科目がわかるというような平板なものではない。

後日談があるそうである。園田先生はその後、大学の社会学の講義で、「文化」という概念を学んだ。普通なら、離婚したら子どもがどっちに行くかは「常識」であり、ルールがある。お父さんとお母さんがそのことをことさらに園田少年に聞くのは、お父さんとお母さんが東日本と西日本の出身で、それぞれの地域で普通とされる家族形態がことなり、園田家には「常識」となる自明な世界がないからだ。だからこそ、そうやって毎回風呂談義が繰り広げられるのだ。

園田先生は、この講義を聞いて「なるほど社会学がわかった」と思ったと発言されていた。このときに「わかった」という感じは、アルキメデスが 2000 年以上前に、物体（金細工）の比重を風呂から溢れる水の量で測ることを思いついて、シラクサの街なかに「ヘウレーカ！」と叫びながら飛び出したというものに似ているだろう。見事な「社会学がわかった」である。

ここまでは、初級から中級の「社会学がわかる」までのプロセスであり、園田先生は社会学の講義で文化という概念を知り、それを自分の子ども時代以来の「変だな」「不思議」に重ね合わせることで明智を得た。残念ながら私はこのレベルで「社会学がわかった」という経験がしたことがない。

私は、社会学科に進学したものの、初級・中級のレベルでは社会学をほとんど学ばず、哲学の勉強をしていたからだろう。メルロー＝ポンティとか、フーコー、ドゥルーズなどである。私が社会学を学ぶつもりで大学に入ったにもかかわらず哲学の勉強しかなかったのは、やはり社会学の学び方がわからなかった（教わらなかった）からだと思う。歴史が長い哲学には山のように多様な考え方、複雑な流派がある。多様なのは社会学だけではない。アリストテレスからデカルト、ヴィトゲンシュタインまで哲学のメニューは豊富だ。しかしどんなに違っても「哲学」なのである。この安心感があるかないかはとても大きい。さすがに一流の学問は違う。

それはそれとして、上級のレベルでの「社会学がわかった」「わからなくなった」について次に述べる。

4. 社会学がわからなくなるとき

ハラランボスの教科書は先程の (2) の (a) のタイプであり、この100年ほどの間に、「観察されたこと」を「観察されないこと（仮説）」で説明する社会学の営みを具体・詳細にわたって検証していくという形を取っている。小さな字がびっしり、1000 頁以上にわたる。これまでの主要な研究成果を一つひとつまな板にあげて検証しているので、社会学の財産目録と言える。先ほど述べた進化の過程は淘汰の過程でもあるので、死亡目録のようにも読める。

この教科書の第 14 章は **methodology** であり、それまでの章と異なり、デュルケームの自殺論の「方法」、およびその後の「方法」の批判を検討している (pp. 872-880)。

デュルケームの議論の内容（自己本位的自殺とアノミー的自殺など）は周知のことなのでここでは説明を省略する。一言で言えば、「社会（に法則）あり、ゆえに社会学あり」である。これに対する批判としては、実証主義の立場からと、M.ダグラスら現象学派の立場からの批判がよく知られている。前者は統計のより厳密な利用を求め、後者は、当事者＝つまり自殺をした人の「本当の」意図や周囲の人がこの行為に付与する（解釈する）意味の世界に注目することを求める。ダグラスが周囲の人に注目したこ

とは新しいだろう。この二つの立場は相容れず、交わるところがない。はっきり言って、私にはどちらもも不可知論に陥るしかないと思われるが、その説明も本稿では省略する。

ハラランボスはその先に進む。イギリスのエスノメソドロジーの代表格といえるアトキンソンが 1978 年に書いた *Discovering Suicide* という本を取り上げるのである⁽⁹⁾。

アトキンソンは筋金入りの反実証主義だが、ダグラスら現象学派のそれまでの研究と異なり、当事者として検死官 (coroner) に焦点を合わせた。不自然な死 (unnatural death) の発覚から埋葬許可書の発行に至る検死⁽¹⁰⁾の手続きを調べ、検死官はどのような手順と判断を経て「自殺か否か」の結論を導くかを、徹底した参与観察によって調査した。ハラランボスの見事な要約は以下のようなものである⁽¹¹⁾。

検死官の commonsense theories of suicide (自殺についての常識的な理解) は自殺の原因の説明を含んでいる。もし死んだ人の背景情報がこの説明に適合するなら、自殺という裁決 (verdict) が行われるだろう。アトキンソンは不自然な死の範疇化 (categorizing: 事故か他殺か、自殺かなど: 山本補足) の際に用いられる手続きを次のようにまとめた。

検死官は、死の属性 (死に方、死に場所など: 山本補足)、死亡者の履歴 (病気を患っていたか、離婚歴の有無、経済状況など: 山本補足) を、典型的な死に方、典型的な自殺者の特性という様々な自明な前提 (taken-for-granted assumptions) に照らし合わせて判断するという作業を行うのである。「自殺」とはかくして、ひとつの出来事の上に重ねられた解釈、taken-for-granted assumptions を用いた解釈ということになる。

この文章に続けて、ハラランボスは、'This view has serious implication for research that treats official statistics on suicide as 'facts' and seeks to explain their causes.' と書く (これと同様の文章はアトキンソンの本の p.143 にもある)。アトキンソンの発見は、実証主義者への打撃になっているばかりか、ダグラスらの現象学派によるデュルケム批判を無効にしておき、かつデュルケムの業績の最も根本的な批判にもなっている (社会学がそこまで来るのに 100 年ほどの時間を要したことは感慨深い!)。

デュルケムは、自殺統計を縦横に分析することで、社会統合の強さ弱さ、規制の強さ弱さという説明変数 (マクロ変数) を抽出して、これが自殺数を左右する要素、ひいては自殺の原因だと主張した。見事な法則的理解である。ところが、アトキンソンが発見したのは、不自然な死を調べてそれが自殺であるかどうかを決める権限を持つ検死官が、社会統合の強さ弱さ、規制の強さ弱さと同等の内容の commonsense theories of suicide を判別の基準に使っているということだ。「孤独な老人は自殺する」 (これは自己本位的自殺)、「強く強く生きている人ほど小さなつまずきに弱いものよ⁽¹²⁾」 (これはアノ

⁽⁹⁾ J. Maxwell Atkinson, *Discovering Suicide: Studies in the Social Organization of Sudden Death*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1978.

⁽¹⁰⁾ 検死 (または検視、Postmortem) は、犯罪の嫌疑の有無を明らかにするための刑事手続。「検視から司法解剖」までを含む一括した概念であり、医師による解剖 (autopsy) も含まれるが、検死官は医師ではなく、英国では地方自治体によって任命された司法官吏である。検死官は調査の最終段階で、その死が、犯罪によるものか、自殺か、事故か、病死か、自然死か、不明かのいずれかの判断 (裁決、Verdict) を行う。この判断には抗告 (異議申し立て) の手続きがない。

⁽¹¹⁾ Haralambos and Holborn, op.cit., p. 717.

⁽¹²⁾ 中島みゆきの「誕生」(2001年)にも同様の歌詞がある。

ミー的自殺) など。

社会学の理論にとってこれがどんなに深刻な打撃になるかを私は講義では次のような喩え話で説明している。

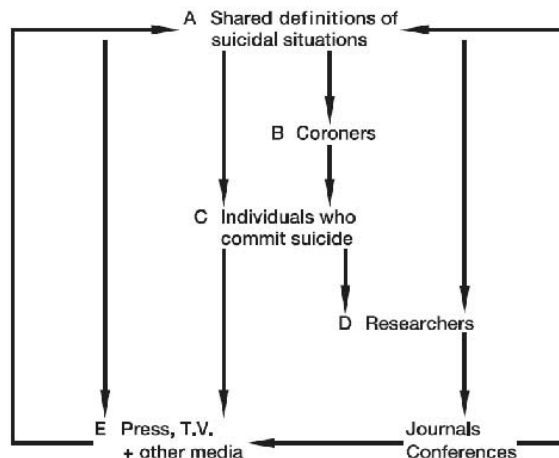
二十日ねずみには、歌を歌う種がいる⁽¹³⁾ということになり、動物学の研究者が一斉にこの変種のねずみ(「みねず」と以下では言う)を探しに行った。手がかりは歌うことである。「みねず」はねずみと姿も形もそっくりで見分けが付きにくい。たくさん集めて分析してわかったことは、「みねず」は歌うということだった⁽¹⁴⁾。つまり、不自然な死から自殺を特定するときの判別基準が、その人の置かれた「社会統合の強さ弱さ、規制の強さ弱さ」の度合いを見ることだとしたら、自殺統計を調べてそこから「社会統合の強さ弱さ、規制の強さ弱さ」が抽出されるのは当然なのである。

私はこのことの含意を何年も考えてきた。人々は常に既に「自殺」について知っている。社会学(者)もその知識の外に立つことはできない、ということではないだろうか?

換言すれば、社会を「もののように観察する」ことはできない⁽¹⁵⁾。デュルケームは間違った研究をしていたのではない。彼の仕事は(たぶん)完璧に正しいが、この人は自分の研究について勘違いをしていたのだ。しかも、途中で間違えたのではない。自殺統計を使って研究することを思いついた最初の時点で、彼は「社会の中に囚われた」のである。なぜなら、自殺統計を使うということは人々の自殺の定義を受け入れるということに他ならないからだ。

アトキンソンは下の図を示す⁽¹⁶⁾。

Figure 6.6.1 *A dynamic model of the transmission of shared definitions of suicide through a social system*



(13) 「歌姫ヨゼフィーネ、あるいは二十日鼠族」『カフカ寓話集』岩波文庫、2003年。

(14) この喩え話は却ってよくわからないという学生もいる。

(15) エミール・デュルケーム『社会学的方法の基準』宮島喬訳、岩波文庫、1978年。

(16) Atkinson, op. cit., p.145.

なんと簡素な図だろう！これがもっとも根本的な意味で「社会学がわからなくなる」位相なのに…。

Bの検死官は当然として、Cには自殺をする当人も含まれている。Dはデュルケームやダグラス、そして実証主義者であろう。こういう循環の考察は悩ましい。

Cはどういう意味だろう？自殺をする人もどこかで自殺を考えた時点でこの循環に巻き込まれたということだろう。「こうなったら自殺かも…」。目の前にそういう選択肢が開かれてしまうと、そこから抜け出すのは大変に困難になると言われている。これはその時々で行為者に開示される選択肢の幅という制約であり、ルーマンのいう「複雑性の縮減」の一面である。

もっと問題なのはアトキンソンの立ち位置である。アトキンソンもDなのか？それとも、こういう因縁の連鎖を外から（超越的な視点から）眺めているのか？そういうことはないだろう。この図の真価は、安易な鳥瞰図ではなく、地道な二点観測と三点観測（ミラーリングとモデリング）の積み上げ（フィールドワーク）によって書かれているところにある。

これは本当に厄介な問題である。ここまで来て初めて、「社会学はわからなくなる」。わかればわかるほど「わからなくなる」。

観察者（社会学者）と観察対象の間に循環が生じてしまっていて、そこからどうにも出られないとも言えよう。アトキンソンもハラランボスも、二人の著作を見る限り、その先のことを議論できていない。そもそもその先のことを考えることは可能なのだろうか？アトキンソンの社会学は「すべての社会学を終わらせる社会学（a Sociology that Ends All the Sociologies）」なのだろうか？⁽¹⁷⁾。

このような堂々巡りは物理学にもあると聞く。量子力学の不確定性原理（ハイゼンベルク）をめぐる観察者効果の議論である（この議論には物理学の中でもいろいろ批判がある）。

「悪い天使」について考えることができるかという議論もある。答えは否。天使という言葉に「よい」という意味が込められているので、天使という言葉を使う限り、哲学者といえども「悪い天使」について考えることはできない。どんな哲学者も言葉の世界の外に出ることはできない。

こうやって論を進めれば、およそ「人間の理性に曇りはないが、壁がある」⁽¹⁸⁾と一般化することも可能で、特に社会学の問題ではないとも言えそうだが、社会学にはどうしてもこの問題に向き合う義務があるように思えてならない。

観察者も観察対象の中にいる——このことはミラーリングやモデリングという概念を持ち出すまでもないことであり、人々は「自然的態度（フッサール）」のなかで社会を理解するときには、そのことも含めて社会（世間）を知るからである。園田少年も、家出をしたときの私もそうだった。そういう「自然的態度」をエポケーしてしまい（現象学的還元）、社会を頭の中でわかる知的対象に変えてしまうと今度は「社会がわかる」という根本がわからなくなってしまうのである。逆に言えば、社会がわかるということがわかると、社会学がわからなくなる。

この問題の先を考えることは、本稿の守備範囲を超えるものであろう。自殺でなくとも、貧困について、あるいは青年期について考えるときにもこの問題はついて回る。もっとわかりやすい例を挙げると、

⁽¹⁷⁾ Dreyfus and Rabinow は、フーコーの仕事を指して、A Phenomenology to End All Phenomenologies と述べている。よく似た関係にあるとも言えよう。Hubert L. Dreyfus and Paul Rabinow, *Michel Foucault, Beyond Structuralism and Hermeneutics*, Chicago: The University of Chicago Press, 1982.

⁽¹⁸⁾ 山本泰・山本眞鳥（共著）『儀礼としての経済』弘文堂、1996年、331ページ。

階層がある。下層・中流・上流という三枚重ねの図は標準であり、わかりやすいが、こういう見立ては（大部分が）中産階級であるところの社会学者の見立てに過ぎない。この社会学者に見えているのは、その人たちの生活世界の近傍の（小さな）差異であって、彼ら彼女らは中産階級は3つなのか8つなのかなどとしきりと議論するが、局所の認識に過ぎない。下層はまったく違う地図をもっている。上流は上流の見立てをもっている。これは、観察者が観察対象の中にいるという典型的な例であろう。

もう少しだけ考えると、これはオブジェクトとメタ（一次理論と二次理論）というようなわかりやすい議論ではないらしいということだ。砂糖の上に乗っている蟻には砂糖しか見えていないだろう。砂糖の上に乗っている自分の姿は見えていないだろう。しかし、上の階層の例で言うと、中産階級という場所から階層（構造）が見えているだけということは、社会学者は誰もがうすうす知っているのであって、だからこそ、そのように批判されたときに何を批判されているかがわかるのである。しかし、アトキンソンのような形で、この循環を図示した研究はこれまでのところ、私は知らない¹⁹⁾。

本稿の最初の方に、社会とは「こと」であると書いた。社会が「こと」であるとは、お互いに影響を及ぼしあっているという事実である。観察者もこの社会という「こと」に参画している。社会学の中で言えば、1960年前後のホーソン実験（Hawthorne Experiments）でも、そのことは気づかれていた。シカゴ郊外にあるウェスタン・エレクトリック社のホーソン工場で、生産性についての客観的な（実証的な）研究をしていたはずのメイヨーらは、奇妙なことに気がついた。研究されるということが研究対象を変えてしまうということ。

たしかに言えることは、社会学はその根本にわからなさを抱えているし、そのわからなさを捨象してはいけないということだ。アトキンソンの議論の貢献もここにある。アトキンソンの議論がなければ、我々ももっと素朴に社会について知ることについて考え、もっと素朴に社会学をやっていたに違いないのである。英語の「素朴な」という言葉（naive）の意味＝「無知」において。

5. おわりに

本稿は、「社会学はわかりにくい」という時々聞く声言っている（だろう）ことを、小分けに整理して少しずつ考えようとしたものである。

「わかりにくい」は一筋縄ではなく、さまざまなレベル、位相があることを示した。社会学はそもそもわかりにくいなどということはない。社会学も中級の定跡のレベルまでなら、（勉強の仕方、教え方を間違えなければ）、決してわかりにくくない。ただし、上級のレベルまで突き詰めるととたんにわからなくなるというのも事実だ。そういう意味で、社会学はいつもどこかで自分を疑っている。この不安の意識こそが社会学の魅力となっていると言って過言でないと思う。

かつてメルロー＝ポンティは、『弁証法の冒険』の中で、ルカーチの『歴史と階級意識』について、この弁証法は自分を疑うことを知っているとした。つまり、歴史の中に自分を見出し、自分の中に歴史

¹⁹⁾ 一次・二次という言葉は社会学ではかなり安易に使われていると思われる。きちんとしているのは、法学の分野のハートである。ここでいう二次ルールとは、いきなり観察者の視点ではなく、当事者たちが一次ルールだけの社会の葛藤（不十分さ）から学んで、もう一段高度なルールのレベルに進むというように説明されている。H. L. A. Hart, *The Concept of Law*, London: Oxford University Press, 1961. = 『法の概念』長谷部恭男訳、ちくま学芸文庫、2014年。

を見出す術を知っている⁽²⁰⁾、と。これは最高の褒辞であるだろう。「真の哲学とは、世界をみることを学び直すこと」⁽²¹⁾であるなら、社会学は「社会について知るということを学び直すこと」だと言える。

しかし、社会を探究することは、メルロー＝ポンティのように知覚の世界を奥深く探究することとは違う。知覚の世界を探究して、なぜ見えないもの（＝影）が知覚の世界の本質的な要素かなどという存在論的な議論をすることと、アトキンソンの議論のエッセンスは意味が違うだろう。ライト・ミルズが言うように、「社会学は、社会を変えていかないと意味がない⁽²²⁾」。

私たちは社会をどう認識しているか（常に既に知っている。社会学者もその一部に過ぎない）から始めて、どうすれば社会を変えていけるか？ 変えていくにはどういう手続き（手順）が必要なのか？

この点までをも含めて社会学の研究と教育の課題であると思う。

私が駒場で 30 年あまりにわたって社会学の授業を担当して、できたこととできなかったことを本稿に記した。

本稿の内容は、この 20 年ほどにわたって私が教養学部の 3 年生 4 年生を対象に教えてきた講義の中身の一部である。

この授業を教えていたのは私だが、それと同じくらい、履修した学生から質疑や期末レポートを通して教えられることが多かった。ここにその旨を記して、学生たちへの謝辞としたい。

それなくして、私はここまで考えることはできなかった。

⁽²⁰⁾ Maurice Merleau-Ponty, *Les Aventures de la Dialectique*, Paris: Gallimard, 1955. = 滝浦静雄ほか訳『弁証法の冒険』みすず書房、1972 年、78 ページ。

⁽²¹⁾ Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la Perception*, Paris: Gallimard, 1945. = 竹内芳郎ほか訳『知覚の現象学 1』みすず書房、1967 年、24 ページ。

⁽²²⁾ C. Wright Mills, *The Sociological Imagination*, Oxford: Oxford University Press, 1959.

始まりの時 寡黙と沈黙の間で —— 山本泰先生を送る

“Sound of Silence”

佐藤俊樹

1.

ミッシェル・ウエルベックの『プラットフォーム』に、こんな文章がある。「社会学の修士課程に進んだ。彼女はそこでも早々に失望した。領域自体は興味深かった。きっと新しい発見がたくさんあるにちがいがなかった。しかし用意された教材、そこに展開されるセオリーは滑稽なくらい簡略だと思った。すべてがイデオロギー臭く、曖昧で、アマチュア臭かった」（河出文庫、159頁）。

最初に読んだとき、くすっと笑ってしまった。一つは「この人は社会学くさい小説家だなあ」とあらためて思ったからだが、もう一つは、皮肉で精密な描写がやはり見事だったからである。大学の教養科目で、あるいは専門課程で、あるいは大学院で、同じような失望をおぼえた人は少なくないだろう。正面装飾は魅力的、でも内部に入ると張りぼて。語られる題材はとても興味ぶかい、でも語る言葉は慣れてしまえば定型的で、凡庸で、ある種の穢さすら感じさせる。

それはまだ社会学を浅くしか知らないせいだ、と玄人、すなわち職業的社会学者は言いたくなるかもしれない。けれども、その反論はまちがいだと私は思う。社会学にはたしかに、そんなところがある。

例えば、手間暇かけた丁寧な調査の結論として、驚くほど単純な図式が語られる。もっと深みがあるはずなのに、なぜか底に足がついたことになってしまう。大学院の山本ゼミで私の2学年下にあたる遠藤知巳さんが『フラットカルチャー』という論集を編んでいて、旧社会学研究科や総合文化の山本ゼミに出ていた人も何人も寄稿しているが、まさに「遠浅」。そんな浅さにつきまわっている。

だからこそ、この浅さをただ否認することからは、何も始まらない。さらにいえば、社会学を浅いとしてただ否定することからも、たぶん始まらない。「社会学を否定する」というと、他の分野の人は驚くかもしれないが、社会学はつねにその内部に反社会学を生み出してきた。「社会学なんか知らなくていい、社会のことだけ知ればいい」と言いながら、大学で社会学を教えられる。あるいはその鏡写しだが、「社会学はつまらない」と言いながら、社会学者と同じような仕事をしていられる。

社会学の奇妙な浅さとは、そういうものだ。「社会学者」を名乗ろうと名乗るまいと、その底なしの浅さから逃れることはできない。もちろん、こう書いている私自身もふくめて。あえて相関社会科学的に言えば、たぶん全ての社会科学にそういう面はあるが、それが最も典型的に、いや最も徴候的に顔を出すのが社会学ではないだろうか。

2.

……と、いつもそんな風に泰先生の演習は始まっていく。

「送る言葉」にしては変に振じくれた文章だなあ、と思われたかもしれないが、山本ゼミに入るとこういう目にあう。一言でいえば、逃げ場がない。否定すれば、肯定される。肯定すれば、否定される。

肯定できる面と否定できる面とがあります、たとえば「国会答弁みたいだねえ」と返される。黙っていれば、いてもいなくても同じ存在にされてしまう。実際、あんなに喋りにくい場はなかった。

ふつうの大学院の演習はもっと楽にやれた。例えば、誰かの発表を聞くのであれば、聞きながら、関連する既存の議論を頭のなかで検索すればよい。必ず何か見つかる。それも多くの場合、発表者の主張に肯定的なものから否定的なものまで、全方位で。なにしろ「すべてがイデオロギー臭く、曖昧で、アマチュア臭」い学問だ。その辺は悪い意味で融通無碍である。

あとはその発表への自分の立場にあわせて、あるいは発表者への個人的感情に任せて、肯定と否定の混ぜ具合を調整すればいい。私自身も大学院生のときに、ほぼ同じ内容の主張を述べた二人の院生に対して、同じ教員が正反対の評価を下した場面に遭遇したことがある（もちろん、山本ゼミではありません）。「アカデミック・ハラスメント」という言葉の片鱗すらない時代だった。

こんな振舞いはいうまでもなく論外だが、社会学の浅さは例えばそういう風にも使える。どこまでいっても、社会学の術語は対象に十分に届かないのだ。だから、必ず隙間ができる。少しばかり器用なら、発表者の先回りをして裏返しにしてしまえる。頭の回転が速ければ、目的地に強烈な地雷を仕込むこともできる。

いや、もっと残酷なことさえおきる。そういう^{スマート}狡猾な発言をくり返していると、今度は、そういう奴だとあっさり見抜かれてしまうのである。誰が何をいっても、賛成も反対もできる。程度の差こそあれ、そんなことが比較的容易にできるからこそ、そうしつづけることが本人の空虚さの証明になってしまう。

社会学の浅さは、そういう種類の浅さを炙りだすのにも、残念なくらいちょうどよい。

3.

そして、そういう浅さに泥んでいることは、決して許してもらえない。私にとって山本ゼミはそういう場だった。

そのなかで私がおぼえていったのは、そういう浅さにつきあうことだった。泥まない、でも、ないことにはしない。自分がそうでないもしない。一言でいえば、自分を安全地帯におかない。それが一番安全なのだ、と文字通り身を以て学ばされた。

当時はそうやってただ生き延びるしかなかったが、教える側になって二十年あまりになると、さすがにもう少し言葉になる。そういう場で、私たちは今でいう内部観察の技法をくり返し練習させられていたのだと思う。

私自身は、現在ではこんな風に喋っている。——社会科学は人が人を観察する科学である。だから、観察する側とされる側が同程度の深度を有する。だからこそ、観察は浅くなる。

観察する側がされる側を完全に把握できるとしたら、両者が同じ深度をもつとはいえない。もしできると頑強に主張すれば、むしろ当人が「イタい」人になってしまう。だからといって、何でもあり、にもできない。それならば、社会学者という専門家もいなくなる。現場の厚みを持ちだしても、結果は大して変わらない。もし本当にそうならば、現場の経験が一番長い人を呼んで、話してもらえばいい。

だから、浅さにつきまといわれていることを認めつつ、そのなかで他人には簡単には語れず、かつ他人

を納得させる（≠賛成させる）言葉をいかに紡ぎだすかを考えていくしかない。その苦しきのなかにかか答えはない。

だからこそ、つねにその場かぎりの、かっこ良くいえば、一期一会の勝負になる。かっこ悪くいえば、その場しのぎのくり返しだ。底なしの浅さに引きずり込まれないためには、対象一つひとつの固有性をできるだけ潰さないようにしなければならない。なおかつ、その対象にしかあてはまらない議論では意味がない。それなら、それこそ現場の経験を積んだ人には絶対敵わないからだ。

その結果として生まれてくるのは、一見不思議なものである。対象の固有性にこだわるからこそ、他の対象との共通性に目を配らざるをえない。個別と一般という、やや粗い二分法バイナリ・コードを使えば、個別性にこだわるがゆえの一般性。そんな考え方だ。

4.

社会学の歴史の上では、これはむしろ逆の方向で考えられてきた。きわめて一般的だからこそ、全ての個別があつかえるのだ、と。

デュルケミアンの「社会学帝国主義」が一番わかりやすいが、T・パーソンズの構造機能主義でも、マルクス主義的社会学でも、そうだ。あるいは、N・ルーマンの意味システム論でも、うっかりすればすぐにそうなる。抽象的な図式がつるつと出てきて、説明されたことにされてしまう。「複雑性の縮減」はその最たるものだ。

そういう意味では、こうした考え方は社会学の公式教義、いわば正統オーソドキシにあたる。丁寧な調査の結論として、ひどく単純でありきたりな図式が語られるのも、おそらくそのためだろう。対象の個別性を肌でわかっている、この公式教義が頭に滲みついて離れられないのだと思う。

しかし、私が山本ゼミで学んだのは、全く反対の考え方だった。一般ゆえの個別ではなく、個別ゆえの一般性、いや共通性への途。泰先生の研究にも、それは色濃く表れているように思う。

私が最初に読んだのは、「消費の禁止／性の禁止(2)」だった（『東京大学新聞研究所紀要』31号、1982年、山本泰・山本真鳥『儀礼としての経済』弘文堂にほぼ同じ形で所収）。サモアでくり広げられてきた儀礼交換 fa'alavelave の分析だ。豚とコザが交換されるという、近代経済学の市場交換にも、婚姻の限定／一般交換にもあてはまらない、奇妙なやり取りに魅せられて読み始めたが、一番心に突き刺さったのは、ある交換の場で失意とともに零れ落ちた、一人の参加者の言葉だった。「これはゲームさ、失うこともあれば得ることもある」（『儀礼としての経済』195頁）。

競争的な交換である fa'alavelave では、交換に臨む各参加者が、心のなかで想像する交換相手に負けまいとして、できるだけ多くの財を交換の場に出そうと競いあう。けれども、fa'alavelave で最も手痛い失敗は、結果的に相手よりも少ない財しか出せなかったことではない。現実の相手が競いあいから降りてしまい、少しの財しか持ってこないことだ。

交換とはコミュニケーションだ、とC・レヴィ＝ストロースは言った。サモアの fa'alavelave もまさにそうだ。fa'alavelave はコミュニケーションであり、だからこそつねにうまくいくとはかぎらない。成功と失敗、名誉と不名誉の稜線をくり返し横断しながら、「今・ここ」の一瞬に全てが賭けられる。

その意味で、コミュニケーションは一般的でも普遍的でもない。あたかも二つの^{モナド}単子の間に開いた窓のように、今・ここでのみ成立する、刹那い共通性。それがコミュニケーションである。先の言葉は、その瞬間に最も手痛い形で立ち会うことになった、一人のサモア人のものだ。「これはゲームさ」——これがコミュニケーションなのだ^①、と。

5.

その後ろ姿はもう一つの論文、「規範の核心としての言語 沈黙論の試み」（『ソシオロゴス』3号、1979年）で語られる使徒ペテロと重なる。

「我その人を知らず」。その言葉が彼をとらえてしまったのは、言葉が伝わらないからではない。ほとんど伝わらないにもかかわらず、何か伝わってしまうからである、他ならぬ彼自身の言葉として。そんな彼の目の前に十数年後、再び現れて”*Quo vadis?*”と問いかけさせてしまう神は残酷だとしか言いようがないが、その残酷さはコミュニケーションのもう一つの顔でもある。

ほとんど伝わらない悲しさと孤独、そして、それでも伝わってしまう苦しみと痛み。今・ここでのみ成立するからこそ、否応なしに受け取られてしまう。当人自身にも、それが何を意味しているかを知りえないまま。「これはゲームさ」——どれほど手痛い失敗であっても、コミュニケーションは成立してしまうのだ。

あれや、これやの言葉を選ぶことはできても、語りやめることはできないし、仮にその時語らないにしても、それは言葉になろうとしてなりえぬ言葉のざわめきによって満たされている以上、純粋な反・言語ではありえない。しかも、それは、いつかは語るしかない言葉によって、言葉と言葉のあいだの間（ま）、つまり、言語の不可欠な一要素となってしまうものだ。このようにして、言葉は切迫した場面に於て、あるいは、持続としてあるしかない日々のくりかえしのなかで語られつづけ、ぼくたちの生活はどこまでも言葉で充満している。言葉は拒めない——この状況は何故か苦しい。

（「規範の核心としての言語」161頁）

「沈黙論」と通称されていた（正題は長くて舌を噛みやすいのだ）このテキストは最初もっと長かったですよ、とはるか昔に橋爪大三郎さんに聞いたことがある。読まされて感想を訊かれて、いくつかの箇所について意見を述べたら、説明がつけ加わるのではなく、著者自身の手でその文章全体がバッサリ削られた。そうやって、書き直されるたびに短くなるテキストを見て、このままだと全部無くなってしまう、と危惧した橋爪さんは、半ば強制的に書き直しをやめさせて、原稿として提出させたんです、と微笑みながら教えてくれた。

①「ファアラベラベはその結果の不確実さ（リスク）においてばかりか、その組み立てそのものにおいてゲームである……。なぜなら、ファアラベラベとは総体としてみるなら、所与となる実体的な理由があるから生ずる機能的システムではなく、まさに所与となっているのは行うことだけであり、行うことによって逆に理由が生じる一連の行為のセットであるからだ。」（『儀礼としての経済』227頁）。なお、第7章注12も参照。

そういう意味では、このテキストは沈黙を語るものであると同時に、それ自体が沈黙に半身を浸されつづけている。おそらく、そうであるしかないのだろう。沈黙を語るという二重の弁証法ディアレクティークに誠実であろうとすれば。

何故に表現は自分自身に対立するに至るか……。それは、既にペテロの挿話にみたように、空間的にも時間的にも有限であるが故に、自分自身の言葉をどこかで裏切ってしまうざるをえない人間の不可避なあり方に発している。人間は、非対称という二重の関係に於て現実にはらまれている以上、必ずやこの不可避にまみれるしかない。そして、この不可避とは、言葉を裏切ることである以上、いかなる言葉も拒みつづける〈言いえぬもの〉であるだろう。しかし、それにも拘らず、表現の運動がこの〈言いえぬもの〉を再び言葉にもたらず時、いわば表現は、この否定を己れ自身のうちに自己矛盾として内化しているのだ。この内化のメカニズムは必ず逆転のメカニズムである。(同 169 頁)

泰先生の語るコミュニケーションの「共」は、いつもそうしたものであったように思う。「共存様式としてのコミュニケーション」(『思想』635号、1977年)にせよ、その後の地域社会のフィールドワークでの共同性にしても、あるいは少数者集団や貧困への眼差しにしても。「個人でもなく社会でもなく」とされる「共」が、お手軽な救済のお約束でないとしたら、それは悲しみと孤独に、苦しみと痛みを彩られるものでもありつづける。

やはり 1980 年代の半ばごろだ。当時人気の絶頂期だった柄谷行人の批評が、大学院の演習で話題になったことがある。さすがに経緯はもう忘れたが、宮台真司さんたちがいつものように元気よく喋った後で、泰先生がぼつりと「マクベス論は面白かったよ」とだけ言った。そんな記憶まで蘇ってくる。

6.

多くの方がご存じのように、泰先生は寡作な学者である。それに対して、たぶん私は専門研究だけにかぎれば、かなり多作な方だろう。けれども、私自身にとってそのちがいは、対照的というよりも、等価なものだ。

ほとんどが伝わらない、だからこそ何かが伝わってしまう。だとしたら、寡黙になるか饒舌になるかしかない。二つは根源的には等価である。言葉そのものが過少であり、かつ過剰であるのだから。

沈黙は、やはり、ギリギリのところまで言葉を追いもとめ、自己自身をつきつめる表現の運動によって養われているからこそ沈黙なのであり、又、言葉も、苦しい沈黙におちるかも知れぬ同じ運動のなかで見出され、語られるべきものだからである。この二つを切り離すことから、居直りの手段としての沈黙と、馴れあいの道具としての言葉しか生まれない……。(同 161-2 頁)

学術とは縁のない環境に生まれ育ち、高校の先生になるつもりで大学に入った私が、たまたま出会った泰先生の社会学はそういうものだった。それが気に入って、本郷に進学後も、駒場の大学院演習に顔

を出した。大学院では指導教員になってもらい、結局、同じ職場で働くことになった。そんな風にここに足をとめ、おちつくことにしたのは、やはり、そういう社会学がここにあったからだと思う。

特定の研究者の名や、特定のキャンパスの名を冠した「△△社会学」という言い方は、正直好きじゃない。けれども、もし仮に「駒場の社会学」といえるような共通性があるとすれば、その候補の一つはこうしたものかもしれない。

個別性ゆえの共通さへの途は、ある種の何でも屋の途でもある。何が対象として今・ここに、すなわち自分の前に現れてくるかは、自分自身で選べないからだ。だからこそ、何が来ても、とりあえず何かを考えられないといけな。考えるに値すると主張できる何かを。

それゆえ、それは「教養」や「相関社会科学」や、"issue-oriented"みたいなものの、ごく近傍を走ることにもなる。その先にあるのが、一つの収束点なのか、それとも互いに近傍になりあう軌跡の束なのかは未だによくわからないが、たぶんこれはわからなくてよいのだろう。

7.

そんなことたちを思い返していると、自分でもくすつと笑えてしまう。

例えば、意味システム論の理論社会学で私が主張したことのの一つは、意味システムがあるといえる状態といえない状態を操作的に区別しろ、であった。もちろん、公式教義は逆である。「システムはある。そこが出発点だ」と御大（ルーマン）が書いているのだから。しかし、それでは理論内在的におかしくなる、と社会学者として主張したわけだが、腹の底では同じくらい強く「それじゃあ全然面白くないじゃないか！」と思っていた。

三十数年前の、何気なく手にした『教養学部報』の新任教員紹介に目をとめて、「あ！」と思った学部二年生の私が、きっとそこにいるのだろう。それで冬学期に、後期課程の教養学科第三の最初の授業をのぞいてみた。

8号館の、どこかの教室だったと思う。椅子に座って新任の教官の到着を待っていた後期の学生か、大学院生らしき人々の間から、やがて一人の痩身の男性が立ち上がり、話し出した。「はい、山本です。これから授業をします」。

今もその声を憶えている。それが始まりの時だった。

山本泰教授の略歴と業績目録

略歴

1951年2月23日 東京都杉並区荻窪生まれ

【学歴】

1969年3月 大阪府立北野高等学校卒業

1970年4月 東京大学教養学部文科三類入学

1974年3月 東京大学文学部社会学専修課程卒業 文学士

1976年3月 東京大学大学院社会学研究科社会学Aコース修士課程修了 社会学修士

1978年9月 東京大学大学院社会学研究科社会学Aコース博士課程中退

【職歴】

1978年10月 東京大学新聞研究所助手

1982年4月 東京大学教養学部助教授

1996年4月～ 東京大学大学院総合文化研究科教授（教養学部兼担）

2004年4月 東京大学評議員・大学院総合文化研究科副研究科長・副学部長（～2006年3月）

2005年4月 東京大学教養学部附属教養教育開発機構執行委員長（～2009年3月）

2012年10月～ 独立行政法人大学評価・学位授与機構客員教授

2016年4月～ 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構特任教授

【主な社会活動】

東京都情報公開条例策定委員会委員（1999年）

武蔵野市第4期調整計画策定委員会副委員長（2007年）

武蔵野市第5期基本構想・長期計画策定委員会委員長（2011年）

台東区就学前教育・保育のあり方検討会座長（2012年）

【その他】

フルブライト奨学金によりカリフォルニア大学バークレー校にて客員研究員（1990～92年）

業績目録

【論文・著書】

「相互主観性としての自己と他者：現象学と G. H. Mead」（修士論文、大学院社会学研究科）、1976年

「〈共存在〉様式としてのコミュニケーション」『思想』635: 29-51、岩波書店、1977年

- 「規範の核心としての言語：沈黙論の試み」『ソシオロゴス』3: 160-75、1979年
- 「消費の禁止／性の禁止（1）：サモア社会における交換システムの構造」共著、『東京大学新聞研究所紀要』29: 67-186、1981年
- 「消費社会の身体技術論：〈性の広告〉を準拠として」（共著）、『（財）吉田秀雄記念事業財団助成研究集（第14次）』pp.261-286、1981年
- 「消費の禁止／性の禁止（2）：サモア社会における交換システムの構造」共著、『東京大学新聞研究所紀要』30: 81-161、1982年
- “Broadcasting in a Traditional Society: A Case Study on Radio in Western Samoa”『社会科学紀要』34: 169-193、東京大学教養学部社会科学科、1985年
- 「デュルケム」を超えて『現代社会学 21』12(1): 34-43、アカデミア出版会、1986年
- 「『間人社会』の比較社会学：イエ社会とアイガ社会の近代化をめぐる」『文化と現代社会』pp.291-324、東京大学出版会、1987年
- 「戦略的 CC の展開」『コーポレート・コミュニケーション研究会 報告書』pp.46-58、日本経済新聞社マーケティング企画部、1987年
- 「マイノリティと社会の再生産」『社会学評論』44-3: 262-281、日本社会学会、1993年
- 『ライブラリー相関社会科学 2：ジェンダー』共編著、新世社、1994年
- 「ゆがんだくるつぼ」『アメリカと日本』pp.95-118、東京大学出版会、1994年
- 『儀礼としての経済：サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ』共著、弘文堂、1996年
- 『実用重視の事業評価入門 マイケル・クイン・パットン著』共編訳、清水弘文堂、2001年
- 「教育と入試」共著、『東京大学大改革 現状と課題 4 2004』pp.29-38、東京大学出版会、2005年
- 「東京大学における教養教育の評価と課題」共著、『大学評価・学位研究 1』pp.53-64、大学評価・学位授与機構、2005年
- 『教養のためのブックガイド』共編著、東京大学出版会、2005年
- 「授業評価を真に活用するために」『FD ジャーナル第 6 号』pp.38-44、跡見学園女子大学、2007年
- 「教養教育の新たな挑戦」共著、『大学評価文化の展開：評価の戦略的活用をめざして』pp.45-56、ぎょうせい、2008年
- 『社会学ワンダーランド』共編著、新世社、2013年
- 「社会がわかるとはどういうことか？社会学がわかるとはどういうことか？」『国際社会科学』第 85 輯、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻、2016年

【報告書（地域社会調査関係）】東京大学教養学部相関社会科学研究室

- 『青森県佐井村の地域活性化』、1995年
- 『熊本県小国町のまちづくりに関する学術調査』、1996年
- 『長野県栄村における地域社会の創造』、1998年
- 『東京都目黒区におけるコミュニティと福祉社会』、1998年
- 『生活再建とネットワーク：阪神淡路大震災から 4 年の検証』、2000年

『被災地救援・復興支援：神戸ボランティア 99 人の生き方と言葉』、2003 年
『ケアの社会化とコミュニティ：2002 年度世田谷区調査最終報告書』、2004 年
『ネットワークと地域福祉：2003 年度世田谷区調査最終報告書』、2004 年
『地域活性化の課題：路線商店街を中心として』、2012 年

【報告書（その他）】

『在日と私たち』東京大学教養学部、1995 年
『在日と私たち 2』東京大学教養学部、1996 年
『東京大学の韓国人留学生：その生活状況と日韓関係への提言』共著、東アジア地域研究会、1997 年
「駒場キャンパスにおける国際交流：AIKOM 留学に関する調査と提言」東京大学教養学部、1998 年
『国際標準の学部初年次教育実現に向けて』東京大学教養学部、2007 年
『ジェネリックスキルとしての討議力』東京大学教養学部、2009 年
『教育から学びへ：大学教育改革の国際的潮流』東京大学教養学部、2010 年
『討議について討議する』東京大学教養学部、2010 年

【冊子】

『授業の中での討議力養成 HINTS 10』東京大学教養学部、2011 年
<http://www.komed.sakura.ne.jp/tougi/documents/hints10.pdf>

【講演・口頭発表】（主たるもの）

報告「大学教育改革プログラム合同フォーラム（平成 22 年度）」、文部科学省主催、2011 年 1 月
モデル授業「未来発見フォーラム」河合塾主催、2011 年 10 月と 2013 年 10 月
講演「ジビエ料理で守れ、日本の里山と鳥獣被害」日仏会館、2013 年 3 月
講演「東大での学びのすゝめ」佐賀県立佐賀西高等学校、2013 年 9 月
講演「141 年後の『学問のすゝめ』」長崎県立長崎西高等学校、2013 年 10 月

東京大学大学院総合文化研究科 国際社会科学専攻 紀要
国際社会科学 2015 第 65 輯 抜刷

2016 年 3 月 31 日

編集・発行

東京大学大学院総合文化研究科 国際社会科学専攻

〒153-8902

東京都目黒区駒場 3-8-1

TEL 03-5454-6123、6136